

ゾラとショーペンハウアーの厭世哲学

『生きるよろこび』をめぐる

田中 琢三

1. 『生きるよろこび』について

エミール・ゾラの「ルゴン＝マッカール叢書」(*Les Rougon-Macquart, Histoire naturelle et sociale d'une famille sous le second Empire*, 1871-1893, 以下「叢書」と略記)の第12巻『生きるよろこび』(*La Joie de Vivre*, 1884)は、その前後に書かれた第9巻『ナナ』(*Nana*, 1880)や第13巻『ジェルミナル』(*Germinal*, 1885)のような、膨大な資料収集に基づく叙事詩的な大作に比べると、ダイナミズムを欠く地味な作品という印象は否めない。登場人物はごく少数で、舞台はノルマンディー海岸の一寒村に限定されている。しかし『生きるよろこび』を、ゾラがそれらの大作の合間に息抜きのために書いた気晴らし小説とみなすのは誤りである。アンリ・ミトランの草稿研究²によると、この小説は、まず1880年秋頃に構想され、その時、ゾラは、全体の構成やあらすじを粗描し、それを何度か練り直すものの、この創作プランはいったん中断される³。そして、彼は第10巻『ごった煮』(*Pot-Bouille*, 1882)と第11巻『オ・ボヌール・デ・ダーム百貨店』(*Au Bonheur des Dames*, 1883)の「叢書」の2作品を完成させた後、1883年初頭から、前のプランをもとに『生きるよろこび』の創作を再開し、1883年の末に脱稿する。2年間の中断があるにせよ、『生きるよろこび』の創作期間は「叢書」の中では異例の長さで、特にあらすじに関して試行錯誤を重ねている⁴。つま

¹『生きるよろこび』の引川およびアンリ・ミトランの草稿研究は、次のプレイヤード版による。(以下Pl.と略記)

Émile Zola. *Les Rougon-Macquart, Histoire naturelle et sociale d'une second Empire*. t.III. Gallimard. « Bibliothèque de la Pléiade ». 1964.

²Pl., pp.1735-1771.

³中断の理由は、ゾラが母親の死に直面したことにある。 Voir *Ibid.*, p.1750.

⁴パリの国立図書館に現存する『生きるよろこび』の準備草稿の中で、ébaucheと名づけられた作品のあらすじの粗描をする草稿は109枚あり、これはébaucheに関しては「叢書」中で最も多い。ちなみに2番目にébaucheの枚数が多いのは、第18巻『金』(*Argent*, 1891)で101枚である。

り、この小説は、気晴らしどころか、かなりの難産の末に生み出された作品なのである。そして、内容的にも、もろもろの自伝的要素が取り入れられた半自伝的小説であり、苦しみに満ちた世界において、人生をいかに生きるべきかを模索した哲学的小説でもある。このようにゾラの人生哲学を直接的に反映した作品としては、「叢書」中、第20巻『パスカル博士』(*Le Docteur Pascal*, 1893)とともに重要な作品といえる。『生きるよろこび』は、当時、文壇で流行していたショーペンハウアーの厭世哲学⁵を題材の一つにしているが、ゾラはそれを作品の単なる装飾として取り上げたのではない。彼は、このドイツ人の思想を媒介にして、上述したような自らの人生哲学を小説の中で展開しているのである。

本論考では、ショーペンハウアーの厭世哲学が、『生きるよろこび』にどのように取り込まれているかを分析することで、この小説に反映されたゾラの思想を探ってみたい。

2. ブルドー編集の『箴言集』

『生きるよろこび』は、ポーリーヌ・クニユとラザール・シャントーというそれぞれ作者の分身と思われる2人の主人公を軸にして物語が展開する。ポーリーヌは、明るく心身ともに健康な女性であり、ラザールは、神経症で精神の不安定なペシミストである。そして、このラザールのペシミズムはショーペンハウアーの厭世哲学に影響されている。それは、「ショーペンハウアーの天才的な警句や大げさな暗い詩だけをとどめた未消化の厭世哲学⁶」であり、ラザールは厭世哲学の悲観的な側面のみを受け入れ、それをより過激に解釈し、救いがたいペシミズムに陥ってゆく。ゾラは『生きるよろこび』刊行直後のある書簡で、ラザールについて、次のように解説している。

私は、ラザールを、形而上学者つまりはショーペンハウアーの完全な弟子にするつもりはなかったのです。なぜなら、そんな人間はフランスにはいないからです。逆に、私が言っているのは、ラザールがその教義を「未消化」なのであ

⁵フランス語の *pessimisme* には、ショーペンハウアーの哲学と一般的な悲観主義という2つの意味がある。本論考では、前者の意味での *pessimisme* を「厭世哲学」、後者を「ペシミズム」と表記する。なお、フランスで *pessimisme* という語が一般化するのには、ショーペンハウアーの哲学がフランスに本格的に紹介されて以降のことであると推測される。例えば、リトレの『フランス語辞典』(1863-1872)の *pessimisme* の項目には、「新語。ペシミストの見解」としか記述されていない。(Émile Littré, *Dictionnaire de la langue française*, t.5, Gallimard-Hachette, 1965, p.1776.)

⁶Pl., p.883.

って、彼はまさに我が国で流布しているような厭世哲学の思想の申し子だ、ということなのです。私は最もありふれたタイプを取り上げたのです⁷。

ここでゾラは、ラザールがショーペンハウアーの厭世哲学を「未消化」であることを強調し、それが当時のフランス人の典型的なショーペンハウアー理解の仕方だ、と主張している。それでは、ゾラのいう「我が国で流布しているような厭世哲学の思想」とは、どのような思想なのだろうか。

ショーペンハウアーの厭世哲学が、フランスで受容され始めるのは、『両世界評論』にシャルメル＝ラクールのショーペンハウアーに関する評論が発表された1870年以降のことである⁸。しかし、ショーペンハウアーの主著『意志と表象としての世界⁹』のフランス語訳が刊行される1886年まで、フランスでは、彼の哲学に関しては、その抜粋を集めたアンソロジーや『哲学小品集』などの翻訳しか出版されていなかった。しかし、すでに1880年代前半、文壇、特にユイスマンスやモーパッサンら、当時30歳前後の自然主義作家達の間では、ショーペンハウアーの厭世哲学はかなり浸透していた。若手作家達にショーペンハウアーの悲観的な思想が受け入れられた原因は、彼らのメンタリティにペシミズムの素地があったためだと考えられる¹⁰。そして、この流行に拍車をかけたのは、ジャン・ブルドーが翻訳、編集して1880年に刊行した、ショーペンハウアーの『箴言集¹¹』(*Pensées maximes et fragments* 翌年から *Pensées et fragments* と改題して版を重ねる)がフランスで流布したことである。『箴言集』はブルドーが、ショーペンハウアーのいくつかの著作や書簡から、恣意的にさまざまな文章を抜粋し、それらを自分でフランス語に翻訳してテーマ別に編集したアンソロジーである。この本は、『生きるよろこび』との関係においても重要であるので、以下でその構成を詳しくみていきたい。

⁷Lettre à Édouard Rod, 16 mars 1884. Émile Zola. *Correspondance*. t.III. Presses de l'université de Montréal-CNRS. 1985.. pp.82-83.

⁸Voir René Ternois, *Zola et son temps. Lourdes, Rome, Paris*. Les Belles-Lettres. 1961. pp.17-20.

⁹ショーペンハウアーの作品やその日本語タイトルについては次の翻訳を参考にした。

『ショーペンハウアー全集』、全14巻、白水社、1972-1975年

¹⁰彼らは20歳前後の青年期に、普仏戦争の敗北とパリ・コミューンの騒乱を体験している。また、彼らと同世代のポール・ブールジェは、『現代心理論集』(*Essais de psychologie contemporaine*. 1883-1885)において、自分たちの世代がペシミズムに侵されていることを認知し、それを前世代の文学との関連において分析している。

¹¹『箴言集』のテキストは、以下の版を参考にした。

Arthur Schopenhauer. *Pensées et fragments*, traduits par Jean Bourdeau. 23th édition. Félix Aican. 1922. (以下、*Pensées et fragments* と略記)

まず、序文として、ショーペンハウアーの生涯や思想を簡単にまとめたブルドーの文章があり、続いてショーペンハウアーの書簡が何通か掲載されている。そして本文では、いくつかのテーマに分けて、ショーペンハウアーの文章の抜粋が編集されている。そのテーマは、順に「世界の苦しみ」「愛」「死」「芸術」「道徳」とあり、付録として「宗教」「政治」「人間と社会」「諸国民の特性」がある。冒頭の「世界の苦しみ」と「愛」の二つの章は、分量的に多く、合わせると全体の約半分になるが、内容的にもショーペンハウアーの厭世哲学の最も過激なパッセージの数々が収められている。「世界の苦しみ」の章の前半は、『哲学小品集』の第2巻第12章「この世の悩みについての説教に対する補遺」から、後半は、主に『意志と表象としての世界』から抜粋された文章が収められている。これらは、人間がこの世界で生きて行くことが、いかに苦しみと倦怠に満ち、いかに悲惨なことであるかを論じたものである。続く「愛」の章は、前半が『意志と表象としての世界・続編』の第44章「性愛の形而上学」のほぼ全訳で、後半は『哲学小品集』の第2巻第27章「女について」から抜粋された文章が中心になっている。この「性愛の形而上学」と「女について」は、ショーペンハウアー哲学が女性蔑視の思想とされるゆえんとなっている文章で、性欲あるいは女性について論じられている。「性愛の形而上学」は、人間の恋愛感情や性的欲望は、いくら崇高に見えるものでも、実際は個人の意志に基くものではなく、子孫をつくり、種属の典型を維持しようとする目的のために、種属の「意志」が人間に与えた妄想である。つまり、人間は盲目的な「意志」の命じられるままに、種属のために行動しているに過ぎない、といった内容である。そして「女についても、女性は愚かであらゆる面で男性に劣った第二の性である、という過激なアンチ・フェミニズムの主張を含んだエッセーである。このように『箴言集』の読者は、まず冒頭からショーペンハウアーのあまりにも悲観的な世界観に驚かされ、ついで、徹底した女性蔑視の思想に面食らうことになる。おそらくブルドーは、大衆の興味を刺激するために、このような構成にしたのだろうが、実際、このアンソロジーはフランスにおけるショーペンハウアー厭世哲学のいわば通俗化に拍車をかけたようだ。そして当時、ゾラと交友があり「メダンのグループ」と呼ばれた若手の自然主義作家達も、『箴言集』のブルドーが翻訳したショーペンハウアーの文章に大きな影響を受けている¹²。『箴言集』の文章が、彼らの著作に取り入れられている例を、以下で挙げて

¹²Voir René-Pierre Colin, *Tranche de vie. Zola et le coup de force naturaliste*. Presses universitaires de Lyon, 1988, pp.184-191.

みたい。

モーパッサンは、前述したブルドー訳の「女について」からほとんど剽窃した文章を新聞に掲載したり¹³、『死者のかたわらで』(*Après d'un mort*, 1883) というショーペンハウアーを題材にしたコントでは、『箴言集』の序文を参考にしてショーペンハウアーの人物像を描いている¹⁴。なお、モーパッサンの作品群の基調をなすペシミズムが、ショーペンハウアーの厭世哲学の影響を受けていることは有名だが、彼は『箴言集』の編者ブルドーの知人であり、ブルドーとの直接の会話からショーペンハウアーを知った、とも言われている¹⁵。また、ユイスマンスの、日常生活におけるペシミズムが濃厚に表現された短編『流れのままに』(*AVau-l'eau*, 1882) の最後の部分で、ショーペンハウアーの「人間の生活は、苦しみと倦怠の間を振り子のように揺れる。」という箴言が出てくる¹⁶が、これは『箴言集』の「世界の苦しみ」の章にあるブルドーの翻訳¹⁷をそのまま引用している。そして、この作品の最後の文は「最悪の事態が起こる¹⁸」だが、これも「世界の苦しみ」の章に同じ表現がある¹⁹。また『さかしま』(*A Rebours*, 1884) の中に引用されるショーペンハウアーの言葉「もし神がこの世を創造したのだとすれば、私はこんな神にはなりたくはない。この世の悲惨は私の心を引き裂くであろう²⁰」も、同様に「世界の苦しみ」の章にあるブルドーの翻訳²¹をそのまま引用している。このように『箴言集』はいくつかの作品に引用されているが、それは表面的な現象にとどまらず、『箴言集』の暗い警句の数々は、若手作家達のペシスティックなメンタリティに合致して、彼らのペシミズムのいわば理論的支柱になった²²。ゾラのいう「我が国で流布しているような厭世哲学の思想」とは、おそらく、彼と交友があった若手の自然主義作家達が感銘を

¹³André Vial. *Guy de Maupassant et l'art du roman*. Nizst, 1956. p. 116.

¹⁴Voir Guy de Maupassant. *Contes et nouvelles*, t.I. Gallimard, « Bibliothèque de la Pléiade ». 1974. pp. 727-731. pp. 1510-1511.

¹⁵アルマン・ラヌー著、河盛好蔵・大島利治訳、『モーパッサンの生涯』、新潮社、1967. pp. 224-227. を参照。

¹⁶Joris-Karl Huysmans, *Œuvres complètes*, t.V. Genève, Slatkine Reprints, 1972. p. 85.

¹⁷*Pensées et fragments*, p. 70.

¹⁸Huysmans, *loc. cit.*

¹⁹*Pensées et fragments*, p. 55.

²⁰Huysmans, *op. cit.*, t.VII, p. 127.

²¹*Pensées et fragments*, p. 77.

²²特にユイスマンスはショーペンハウアーの厭世哲学に心酔しており、1884年3月のゾラ宛の書簡では、「存在しうる最も堪へになり、最も論理的で、最も明快な思想」と書いている。Huysmans. *Lettres inédites à Émile Zola*, Genève, Droz, 1953. p. 99.

受けた『箴言集』で強調された思想、つまり悲観的な側面が際立った厭世哲学の思想なのである。それが『生きるよろこび』のラザールの「ショーペンハウアーの天才的な警句や大げさな暗い詩だけをとどめた未消化の厭世哲学」だと思われる。

ゾラが、ショーペンハウアーの著作をどの程度読んでいたのかは明らかではない。しかし『生きるよろこび』を執筆する際に、参考資料の一つとして『箴言集』を読んでおり、その覚書がショーペンハウアーに関する準備草稿²³の中に残されている。またゾラは、この準備草稿の中で小説のタイトルとして次の9つの候補を挙げている²⁴。

- ① La vallée de larmes ② La joie de vivre ③ L'espoir du néant ④ Le vieux cynique ⑤ La sombre mort ⑥ Le tourment de l'existence ⑦ La misère du monde ⑧ Le repos sacré du néant ⑨ Le triste monde

このうち、採用された唯一明るい②と⑨を除いて、すべてブルドー編集の『箴言集』に見出される言葉である²⁵。また、このようにタイトル候補にショーペンハウアー関連の用語を考えていた、という事実は、この作品におけるショーペンハウアー厭世哲学の比重の大きさを示しているともいえる。

3. ポーリーヌと生きるよろこび

これまでラザールの「未消化の厭世哲学」について述べてきたが、それでは、ゾラが理解したところの「消化された厭世哲学」とはどのようなものだったのだろうか。結論からいうと、それは、もう一人の主人公ポーリーヌによって体现されている思想なのである。ポーリーヌは、数々の死や苦しみが描かれたこの暗い小説の中で、唯一、明るく健康的な存在である。未来に対して希望を抱くオプチミストであり、さまざまな苦悩や困難に直面するが、ペシズムに陥ることはなく、生きることそのものへの信頼によって、それらを超克していく。小説の中で、ポーリーヌは、ラザールが説く過激に解釈

²³Pl., p. 1764. その他ショーペンハウアーに関する資料として、ゾラはテオデュール・リボー『ショーペンハウアーの哲学』や、ピエール・ラルース『万有大事典』のショーペンハウアーの項などを参照している。

²⁴Pl., pp. 1775.

²⁵これらの言葉が出てくる *Pensées et fragments* のページは、①p. 14 と p. 190 ②p. 14 ③p. 15 ④p. 26 ⑤p. 56 ⑥p. 77 と p. 181 ⑧p. 77

されたショーペンハウアーの厭世哲学に対して異を唱えている²⁶ので、一見すると、ゾラは、ポーリーヌを反ショーペンハウアーの象徴にしているかのように思われる。しかし、それは、ショーペンハウアーの「未消化の厭世哲学」に反対している、という限りにおいて正しいのであって、実は、彼女の言動こそ、ゾラが理解し共感したショーペンハウアー哲学を体現しているといえる。このことは、ゾラが、ブルドーが翻訳・編集した『箴言集』を、どのように読んだかを検討することによってうかがえる。前述したように、ゾラは『生きるよろこび』の準備のために、『箴言集』を読み、その覚書を取っており、それは「恐怖、ショーペンハウアー、人生について」と題されている。この『箴言集』覚書は、ロベール・ラフォン版の「叢書」第3巻の巻末に資料として掲載されている²⁷。以下で、この資料を検討していきたい。

この2ページ足らずの『箴言集』覚書には、ブルドーの『箴言集』の文章の引用あるいはパラフレーズ、それに対するゾラ自身の見解、『生きるよろこび』の登場人物に関する言及などが書かれていている。『箴言集』からの引用やパラフレーズは、必ずしも正確に『箴言集』のページを追ってノートされたものではないが、大雑把に言えば、最初の4分の1はブルドーの序文から、4分の1は本文の「世界の苦しみ」の章から、残りの2分の1は「道徳」の章から書き留められている。注目したいのは、ゾラが「道徳」の章を重視していることである。この章は、分量的には『箴言集』の10分の1ほどであるが、『箴言集』の本文の最後の章であり、内容的にも、ショーペンハウアー哲学の到達点ともいうべき、禁欲主義から導かれる精神の平安と解放、そしてつまり仏教でいう涅槃の境地に至る解脱、に関する文章の数々が収録されている。この章は、「エゴイズム」「あわれみ」「諦観、放棄、禁欲、そして解放」の三部に分かれている。このうち「あわれみ」の部分では、すべての道徳性の根源には、エゴイズムを超越した他者へのあわれみ(pitié)がある、という内容の箴言が並べられている。次の「諦観、放棄、禁欲、そして解放」の部分では、このあわれみの思想を発展させた、いわゆる共苦の思想が提示されている。ショーペンハウアーによれば、他者の苦しみを自らの苦しみとして受け止めることは、すべての生きとし生けるものへの慈悲であり、利己的な意志や欲望の放棄、つまり禁欲主義、自己犠牲につながっていく。このような、『箴言集』の「道徳」の章に収められたショーペンハウアーのあわれみの思想が、ゾラが理解したところの「消化された厭世哲学」だと思

²⁶Pl., p.884, p.887, p.1000.

²⁷Zola, *Les Rougon-Macquart*, t.III, Robert Laffont, coll. « Bouquin », 1992, pp.1625-1626.

われる。ゾラは、このあわれみの思想をポーリーヌに付与した、あるいは、もともと彼女に付与しようとしていたものを、『箴言集』の中に見出した。『箴言集』覚書の中に次のような記述がある。

自分の苦しみを他人のなかに見る。そして苦しむすべてのものに対して、あわれみの情を抱く。それは、とても重要なこと、私のポーリーヌそのものだ²⁸。

『生きるよろこび』の中で、ポーリーヌは、極度の貧困にあえぐ村の子供達に、定期的に食料などを分け与え、文字通り慈善を施している。彼女は献身的な性格で、他人の幸福のために自らの幸福を犠牲にする。そして、物語が進むにつれて、ポーリーヌから利己的な意志や欲望が捨象されていき、彼女の行為は、ショーペンハウアー的な禁欲主義、自己犠牲に到達する。彼女は、ラザールに恋心を抱くが、ラザールのためを思って、嫉妬心を克服し、彼をルイズという別の女性と結婚させることを決意する。その時、ポーリーヌは、不思議な安らぎをおぼえる。

自己犠牲を誇りに思う気持ちは消えてしまっていた。彼女は自分以外のところで、家族が幸せになることを受け入れた。それは、他人への愛における最高の段階であった。自分の姿を消す、すべてを与えるが十分に与えたとは思わない、自分がこしらえたのではなく、自分がわかちあうことのないであろう至福を喜ばしく思うまでに、愛することであった²⁹。

これは、完全にエゴイズムを脱した状態である。そして、物語の最後で、あらゆる状況が悪化しつつあるなかで、彼女は、ラザールとルイズの間に産まれた赤子ポールに希望を託し、育てようとする。

彼女（ポーリーヌ）は幼いポールを揺すり、いっそう高らかに笑って、ふざけて次のように語った。従兄（ラザール）が自分を大聖人ショーペンハウアーに改宗させた。自分は世界の開放に努めるために独身のままでいる、と。実際、彼女は、自己放棄、他人への愛、悪しき人間のうえに広がる善良さであった³⁰。

これは、小説の中で唯一、ポーリーヌがショーペンハウアーの思想を体現していることが暗示された箇所である³¹。冗談めかされてはいるが、ポーリー

²⁸ *Ibid.*, p.1626.

²⁹ *Pl.*, p.1031.

³⁰ *Ibid.*, p.1129.

³¹ ユイスマンズはこの箇所について、ゾラ充ての書簡の中で「実は、本当のショーペンハウアー」:

又自身の口から、それがほのめかされていることが興味深い。ゾラは『生きるよろこび』のイギリスの翻訳者に宛てたとされている書簡で、次のように明言している。

生きるよろこび、とは犠牲的行為のことであり、他人のために生きることなのです³²。

このように、『生きるよろこび』の主題は、ポーリーヌが、ラザールの「消化の厭世哲学」を媒介にして、ゾラが理解し共感したところのショーペンハウアーの厭世哲学、つまりエゴイズムを脱した他者へのあわれみに基づく自己犠牲の思想、を具現化していく過程を描くことにあった、といえるのである。

4. ゾラの思想的変化

ギイ・ロベールは、1883年頃にゾラの思想的変化があったとしたうえで、次のように述べている。

信頼にもとづく受容のテーマ、つまり、生はその醜さにもかかわらず必然的に良いものである、というテーマがゾラにとって重要になり始めたのは、『オ・ボヌール・デ・ダム百貨店』そして『生きるよろこび』においてである³³。

この「信頼にもとづく受容のテーマ」とは、フランス語の *la vie* つまり人生、生活、生命という意味での「生」を良いものとして信じること、あるいはその「生」をいかにして肯定的に受け入れるか、というテーマである。ロベールの指摘するように、1880年代前半からゾラの著作にこのようなテーマが表れてくる。その例として、『オ・ボヌール・デ・ダム百貨店』以降の「叢書」のいくつかの小説に、ポーリーヌのように「生」のうちによろこびを見出す、オプチズムに満ちたヒロインが前面に登場することが挙げられるか

義者は、あなたが笑いながらほのめかしたように、ポーリーヌなのです」と書いている。Huysmans, *loc.cit.*

³²Lettre à un destinataire inconnu, 26. septembre 1883, *Correspondance*, t.IV, p.415.

³³Guy Robert, *Émile Zola, Principes et caractères généraux de son œuvre*, Les Belles Lettres, 1952, p.156.

もしれない³⁴。この「生」の肯定的受容は、一見すると、この世を考える限りでの最悪の世界としたショーペンハウアーの世界観と相容れないようだが、実はそうではない。ゾラは「叢書」の多くの小説で、人間や社会の醜悪な側面を徹底して描いている。彼は、そのような現実、いわば「最悪の世界」を直視し、それと対峙している。そして1880年代前半から、そのようなあるがままの世界、あるがままの「生」を肯定的に捉えようとし始めるのである。この思想的変化の要因³⁵の一つとして、『生きるよろこび』のポーリーヌに体现された、ゾラのショーペンハウアーの厭世哲学の受容があるのではないだろうか。つまり、ゾラは、他人のために生きること、他者へのあわれみにもとづく自己犠牲によって、この「最悪の世界」を肯定的に生きるという思想を、ショーペンハウアーから受容したのである。そしてこのようなゾラの変化は、世紀末へと向かう時代の変化と無縁ではない³⁶が、それについては別の機会に論じることしたい。

³⁴例えば『オ・ボヌール・デ・ダム百貨店』のドゥニーズ、『金』のカロリーヌ夫人、『パスカル博士』のクロチルドなど。

³⁵ゾラは1880年頃に、母親の死や友人達の死に直面するなどいくつかの原因により、メランコリーや死の恐怖、あるいはもろもろの強迫観念に襲われ、時的に神経症に陥っている。この体験は『生きるよろこび』のラザールに投影されているが、この精神的危機とその克服もゾラの思想的变化の要因になったと考えられる。

³⁶例えば、象徴主義を感させるユイスマンスの『さかしま』は『生きるよろこび』と同じ1884年に刊行され、同時期に執筆されたニーチェの『ツァラトゥストラはこう言った』と『生きるよろこび』の間に親近性を見出すことは可能である。